

②4 2026年10月(令和8年10月)



(左)秋田實 (中央)長沖一 (右)藤澤桓夫
(昭和7年) 『大阪春秋155号』より

◆◆◆ 住吉の笑芸人 第2回 ◆◆◆

漫才の発展に住吉区の住人が大きく関わっていたのをご存じでしたか？

それまでは際物的な芸であった「万歳」を家庭で楽しめる「漫才」に変えたのが、「しゃべくり漫才」の元祖「横山エンタツ・^{あきたみのる}花菱アチャコ」です。エンタツは墨江1丁目に住んでおり、そのエンタツに上方漫才の父と呼ばれた秋田實を引き合わせ
^{ふじざわ たけお}たのが、昭和文学界の中心人物のひとりで上住吉に住んでいた藤澤桓夫です。秋田は「蝶々・雄二、
^{ちようちよう ゆうじ}いとし・こいし、ワカサ・ひろし」ほか多くの漫才コンビを育て、上方漫才は大きく発展しました。

^{あかつきしん}「暁伸・ミスハワイ」や西川きよしも住吉に住んでいました。ヘチマ型のギロをこすり上げ、腰を振って
「ア～イ～ヤ～」と甲高い声を連発するミスハワイの合いの手、なつかしいですね。「小さなことからコツ
コツと」西川きよしの「やす・きよ」漫才は、80年代漫才ブームの火付け役になりました。

1800年以上の歴史がある住吉大社を中心として発展してきた住吉の人々が、長年にわたり大衆に
愛された漫才を、伝統的かつ革新的な演芸に発展させる大きな役割を担ったのです。

[執筆]NPO法人すみよし歴史案内人の会 ^{さむね やすひろ} 實宗 康浩



(左)花菱アチャコ (右)横山エンタツ
『吉本八十年の歩み』より